

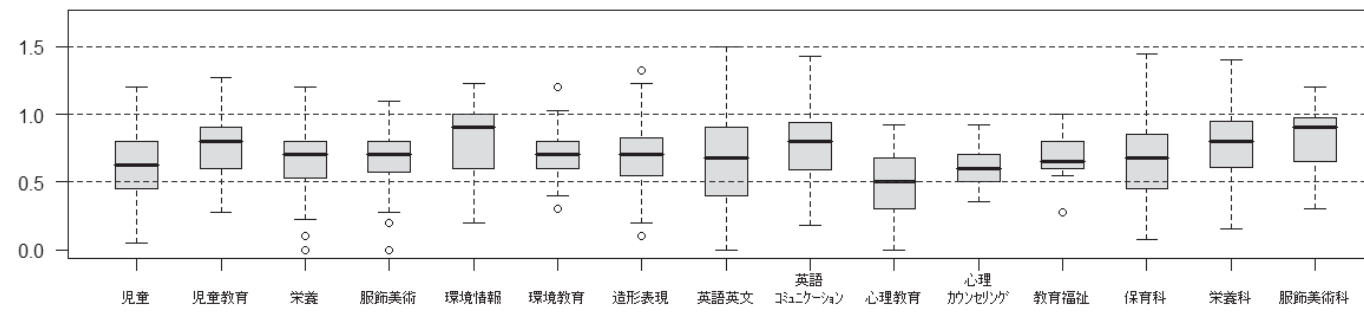


図3 アンケート得点の授業内・四分位範囲の分布 (開講学科・科別)-H21後期

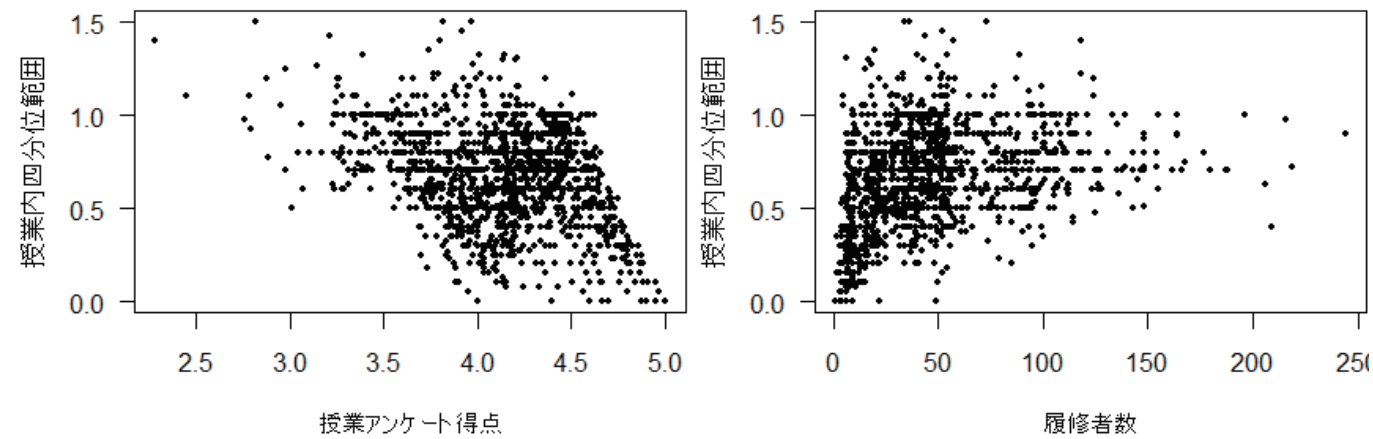


図4 授業アンケート得点あるいは履修者数と授業内・四分位範囲の関係

5. 同じ授業内で学生の意見の食い違いはあるのか？

最後に、授業内のばらつき・変動に注目します。同じ平均4の授業でも、受講者全員が4と答える授業と回答がばらついている授業とでは、何か違った特徴があるのではないかと考えられます。

得点のばらつきは標準偏差という指標で示すことができますが、値を解釈するのが若干難しいので、ここでは、もっと単純な四分位範囲という指標を用います。四分位範囲は、75パーセンタイル点と25パーセンタイル点の差で求められます。その授業に与えられた得点を大きさの順に並べたとき、上位4分の1の位置が75パーセンタイル点、下位4分の1に位置するのが25パーセンタイル点です。たとえば、ある授業の四分位範囲が1.2だったとすると、その授業では上位4分の1の得点と下位4分の1の得点が1.2点違っていたということになります。受講者全員が同じ得点を付けた授業では四分位範囲は0になります。図3は、授業毎に求めた四分位範囲を、学科・科別の箱ひげ図で示したものです。箱の内側に引かれた横線の位置や箱全体が上方にある学科・科ほど、授業内で得点がばらつくことが多かったこととなります（箱の高さには、

授業内変動の程度が授業毎に違う様子が示されます）。

図4は授業内での得点の変動と授業アンケート得点や履修者数がどう関係するかを見るための散布図です。左の図からは、同じ得点の授業でも授業内変動の程度に大きな多様性があることがわかります。また、得点が低い授業では四分位範囲が大きめで、受講者全員が低い得点をつけたわけではないことも伺えます。右の図からは、履修者数が10人程度の授業でも得点が意外にばらつくケースがあること、履修者数が50人あたりを超えると、どの授業でも授業内での得点がある程度は変動していることがわかります。

FD ニュースレター No. 4

2010年7月発行

編集：東京家政大学・東京家政大学短期大学部 FD 委員会

発行：東京家政大学・東京家政大学短期大学部

東京都板橋区加賀 1-18-1 〒173-8602

<http://www.tokyo-kasei.ac.jp/>

FD 活動と平成21年度「学生による授業アンケート」集計結果

1. はじめに

FD 活動は大学院に始まり、大学においても義務化されて2年経過しました。本学においても、FD 活動に関しては、平成21年度からFD 委員会と名称変更し色々の活動を継続しています。各大学は生き残りをかけて、大学教育のレベルアップを目指して必死の努力をしています。FD 活動はその中心的な役割を担うものと捉えられています。各大学はその重要性、必要性を十分認識しながらも、我国においてはFD 活動の進め方に関して定番はなく、「どのようなこと」を「どのように」進めていくか、それぞれの大学で暗中模索しているのが現状です。

毎年3月に定期的に京都で開催されているFD フォーラムに、全国から1000人を超える参加者があることから、FD 活動の現状を垣間見ます。FD 活動の究極の目的は、大学の社会的責任を果たすために、大学教育の質の保証、学生の「社会人基礎力」の充実に尽きるものとも考えられます。

経済産業省も「学生が社会に出て生き生きと活躍するために、どのような能力を身に付ければよいか」、いわゆる「社会人基礎力」の充実を打ち出してきており、「社会人基礎力」は学生・大学・企業をつなぐ「共通言語」として位置付けられてきています（日本経済新聞、平成22年4月30日）。

FD の進め方、方法については全国の国公立・私立大学でのアンケート調査結果が報告されており、それによると、教育技法のレクチャー、教員同士の授業視察、学生による授業評価、模擬授業の実施、ワークショップ、フォーラム・シンポジウムの開催、意見交換会等が挙げられています。

本学においても平成21年度前後期の2回にわたって「学生による授業アンケート」を実施しました。そのアンケート結果を各教員にフィードバックして、教

員からのコメントをまとめました。これに関しては、「FD 活動報告 No.2」として発行されます。

ここでは、平成21年度に実施した学生による授業アンケート結果を総合的に統計処理し、大学全体として、学科・科として、どのような傾向が見られるかをまとめました。本学においては平成19年度から全科目について学生による授業アンケートを継続的に実施していますが、前年度までのデータもふまえて、ここにまとめました。継続的に見ますと色々の問題点が浮上してきています。基本的には学生による授業アンケートを教員がいかに効果的に教育に生かしていくかという課題があります。個々の教員としてできること、学科・科としてできる取り組みがあります。同一学部においても学科によって傾向はかなり異なります。

今回は、継続的に実施してきた学生による授業アンケートの実施上の問題点を統計結果を通して洗い出し、今後の改善に役立たせることをメインにしました。特に学科・科としての今後の取り組みの参考にさせていただければと思います。

平成21年度に実施した「学生による授業アンケート」に対する教員からのコメント、「FD 活動報告 No.2」には、約100名の教員からの提出がありました。平成20年度とほぼ同じ数で、専任教員の2/3に当たります。「アンケート」を未実施の教員もあり、また「コメント」を提出しなかった教員が1/3います。平成22年度1期分の「アンケート」提出も終わり、7月末には前期分の提出を予定しています。教育力の向上を目指すFD活動を前進させるうえにおいても、更なる協力をお願いする次第です。また教員各位からの忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

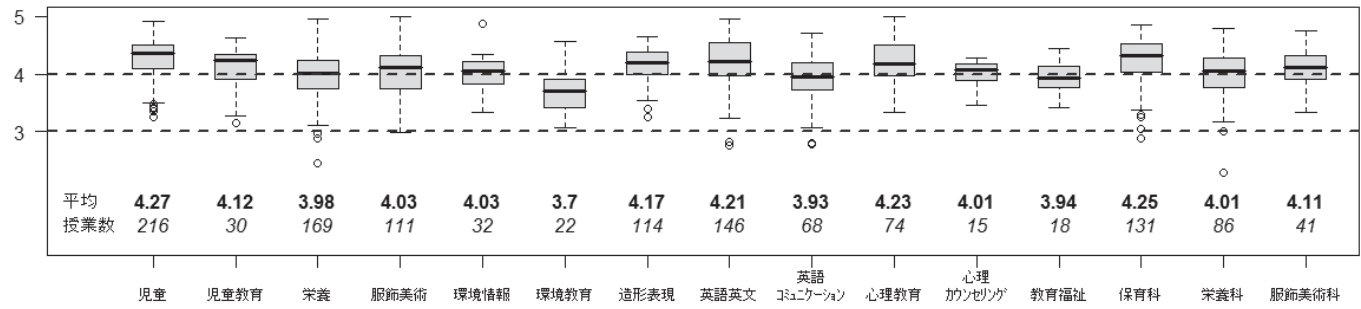


図1 授業アンケート得点の分布 (開講学科・科別)-H21後期

2. 平成 21 年度「学生による授業アンケート」集計結果

今回は、平成 21 年度後期の授業アンケートデータに関する分析を報告します。最初に、授業アンケート得点（10 項目の得点の平均）の分布の特徴を、学科・科別の箱ひげ図 (box-and-whisker plots) で示します（図 1）。箱の内側に引かれた横線の位置は、その学科におけるアンケート得点分布の中央値（それより得点の高い授業と得点の低い授業の数が同じ位置）、箱の上辺と下辺がそれぞれ分布の 75 パーセンタイル点（それより得点の低い授業の数が分析対象授業数の 75 パーセントになる位置）、25 パーセンタイル点です。ほとんどの学科・科で中央値は 4 を超えており、中には 25 パーセンタイル点も 4 を超える学科・科もいくつかありますが、ここからは授業間の得点のばらつきの程度を読みとることができます。

さて、以下では、授業アンケートデータを、3 つの観点から整理してみたいと思います。

- ① いいかげんな回答が多いのか？
- ② アンケート得点の経年変化はあるのか？
- ③ 同じ授業内で学生の意見の食い違いは大きいのか？

3. いいかげんな回答が多いのか？

これまで何人かの方から、「学生はアンケートに飽きて（疲れて、慣れて）いて、真面目に回答していないのではないか」という疑義の声を聞きました。学生がどのようなつもりで回答しているか確実に知ることはできませんが、「無回答項目が多い」「同じ選択肢ばかり選んでいる」などは、いいかげんさの兆候かもしれません。そこで、平成 19 年度後期以降の 5 回分のアンケートデータに基づいて、全回答に占める無回答の割合と 10 項目すべてで同じ選択肢を選んだ回答者数およびその割合を算出してみました。

まず、無回答の割合はそれほど多くなく、5 回のアンケートを通して、少なくとも 97.7% の回答者が 10 項目すべてに答えており、2 問以上に無答の者の割合は全回答者の 0.3% 程度だけでした。一方、表 1 に示したように、全項目で同じ選択肢を選んだ回答者の割合については、平成 19 年度後期のアンケートと比べて、平成 20 年度前期に目立って増えていて、しかも、その後も割合は漸増の傾向にあります。どの項目でも同じ選択肢を選ぶことがいいかげんな回答の証拠だと決めつけることはできませんし、すべて 4 あるいは 5 を選ぶ回答の割合が増えていることは、肯定的回答の増加で喜ばしいことだと言えなくもありません。しかし、異な

表1 すべての項目で同じ選択肢を選んだ者の人数と全体に占める割合

	H19後期 <i>n</i> =47,777		H20前期 <i>n</i> =44,650		H20後期 <i>n</i> =47,477		H21前期 <i>n</i> =46,748		H21後期 <i>n</i> =52,547	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
全項目で「1」を選択	19	0.0%	66	0.1%	51	0.1%	70	0.1%	67	0.1%
全項目で「2」を選択	20	0.0%	54	0.1%	65	0.1%	77	0.2%	122	0.2%
全項目で「3」を選択	404	0.8%	1,619	3.6%	1,955	4.1%	2,140	4.6%	2,921	5.6%
全項目で「4」を選択	892	1.9%	4,130	9.2%	5,042	10.6%	5,010	10.7%	7,065	13.4%
全項目で「5」を選択	2,597	5.4%	3,545	7.9%	4,742	10.0%	4,626	9.9%	6,472	12.3%
計	3,932	8.2%	9,414	21.1%	11,855	25.0%	11,923	25.5%	16,647	31.7%

る観点への反応を知りたくて 10 個の質問を用意しているのに、回答者側はその違いを考慮せず大雑把な印象で答えている可能性も否定できません。今後も回答パターンを注視し、すべての項目で同じ選択肢を選ぶ割合がさらに増えるようであれば、アンケートの実施法を再考すべきかもしれません。

4. アンケート得点の経年変化はあるのか？

つぎに、平成 19 年度後期以降の 5 回分のアンケートにおける回答の変化を取り上げます。ただし、平成 20 年度にアンケート項目の見直し・入れ替えが行われているため、ここでは、入れ替えの前後で共通に含まれている 4 項目に注目します。4 項目は以下の通りです。

- 4：教員の説明の仕方はわかりやすかったですか
- 5：授業に対する教員の熱意はどうでしたか
- 8：あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか
- 9：あなたはこの授業を理解できましたか

平成 21 年度に新設された児童教育学科、環境教育学科、英語コミュニケーション学科、心理カウンセリング学科、教育福祉学科については、平成 21 年度 1 年生

のデータしかないため、1 年生向けに開講された科目だけを分析の対象とし、新設学科の平成 20 年度以前については、前身学科のデータで補って集計しました。各学科・科における 4 項目の平均点の推移は図 2 の通りです。図中では、各項目の番号をそのままマーカーにしてあります。たとえば、「教員の説明の仕方のわかりやすさ」に対する得点推移を見なければ、4 というマーカーを探してください。

それぞれの関心に応じて、いろいろなことを読みとることができると思いますが、ここでは、見方の例を 2 つだけ挙げておきます。

- ①学科・科内での変化については、この 5 回で上昇あるいは下降し続けているところはなく、基本的には大きな変化がないと言えるのではないか。
- ②項目の違いという点から見ると、どの学科・科でも、5 番（教員の熱意）の得点がもっとも高く、4 番（説明のわかりやすさ）、9 番（理解できた）がやや低くなっている。8 番（意欲的に取り組んだ）に関しては、学科・科によって、5 番の項目に近く高めになっているところと、4・9 番の項目に近く低いところとがある。

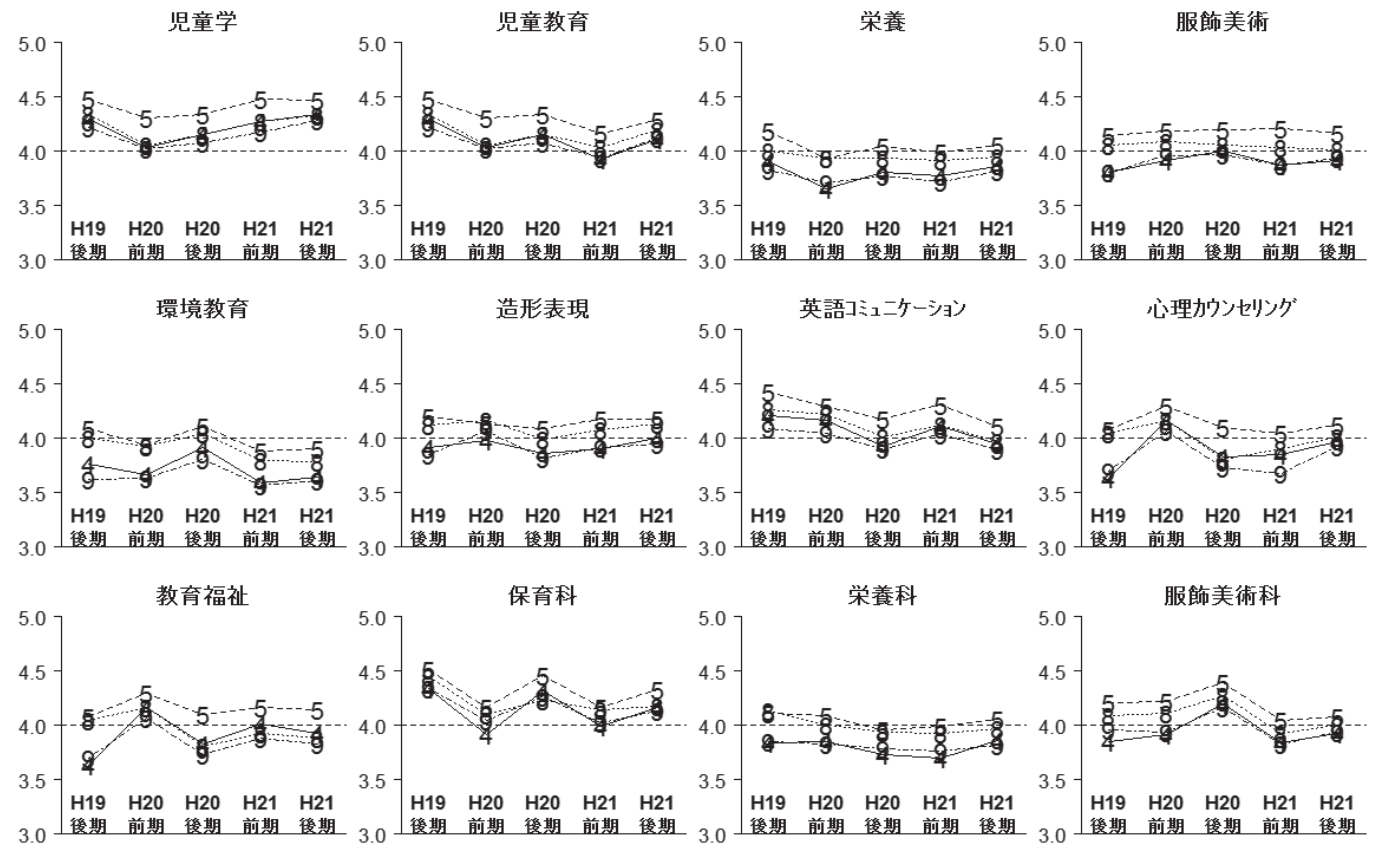


図2 各学科・科のアンケート得点の推移(1年生のみ)